

H27.3.14

# 「告知」という言葉

Dr.

## 和の町医者日記

「生と死」シリーズ⑪

かと、不思議でなりません。横文字や専門用語ばかりを並べてわかりにくい説明をした上に、相手に「わかった？」と、押し付けているような気がしてなりません。

さて、「余命告知」とは何

この連載が始まったのが平成22年3月6日。早いもので5年を超えました。言い換えれば、私は5年、死に近づきました。今回は、「余命告知」について考えてみましょう。

まず、「告知」という言葉は「がんの告知」や「認知症の告知」、「余命告知」という形で広く使われています。

しかし私の大嫌いな言葉です。医師になって30年間、私は「告知」という言葉を使わなかったし、これからも使いません。なぜなのか。「告知」という言葉が、どこか上から目線で、無理やり烙印を押しているように感じるからです。私は「説明」という言葉で十分だと思います。「相手の立場を思いやりながらどう伝えるか」が大事ではないでしょうか。

## 「余命予測」ほどよく外れるものはない

ついでに「インフォームド・コンセント」という横文字も大嫌いです。なぜ「わかりやすい説明」ではいけないの

インフォームド・コンセント 医療行為や治療などの対象者が、その内容についてよく説明を受け、十分理解した上で(英・inform ed)、対象者が自らの自由意思に基づいて医療従事者と方針について合意する(英・consent)こと。説明を受けた上で治療を拒否することも含まれる。

した。そのなかで「余命予測」はよく外れると感じています。

医師は自分の経験と勘で余命を口にしていただけで、確固たる根拠があるわけでは

「老衰であと1時間」と説明した翌日に生き返ったようになり、その後3年生きた人がいました。一方、「末期がんで余命3カ月」と説明した1時間後に亡くなられた人もいました。あるいは「私はが



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 東京医大卒業後、大阪大第二内科入局。平成7年、尼崎市で「長尾クリニック」を開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る、総合診療を目指す。医学博士。近著「平穏死・10の条件」「胃ろうという選択、しない選択」はいずれもベストセラー。関西国際大学、東京医科大学客員教授。56歳。

「余命告知」を「インフォームド・コンセント」だと誤解している若い医師もいます。とにかく「余命」など、信じないほうがいい。だから私は「余命」を聞かれてもま